特集 春秋航空 佐賀発着便就航記念

上海は近くて面白い!!

はじめてさんの上海 2012

佐賀空港から約2時間。東京と同じくらいの時間で行ける一番身近な外国・上海。今年1月18日から就航が始まった春秋航空による上海-佐賀便を体験した。恥ずかしながら初の海外3泊4日。どうなることやら…。

上海1日目

実は30代半ばにして初めての海外。パスポートの取得から始めることになる。エスプラッツ2階の市民サービスセンターで申請できる。必要な写真は同じフロアの佐賀市観光協会で。写真には、いろいろと制約があるので、撮り慣れたところの方が安心で確実だ。その他市町村では5営業日かかるが、同窓口なら一日短い4日で出来る。受け渡しに限り、日曜日午後12時から4時まで対応している。平日忙しい人にもお勧めだ。一応、佐賀の銀行で中国元に両替しておく。千元単位の取扱だった。

初就航セレモニー

パスポート用撮影

佐賀空港へのアクセスは便利になっている。佐賀駅からのバスが、飛行機の出発時刻に合わせて運行されている。車社会の佐賀において無料駐車場は、同空港の最も大きな魅力。800台収容可能で24時間巡回警備と、安心して車を置いておくことができる。

この日は初就航ということで春秋航空の王正華会長や古川康佐賀県知事のあいさつなどセレモニーもあった。入管はスムーズ。真新しいパスポートにスタンプが押される。

春秋航空機内はほぼ満席。少し狭い気もするが、2時間程度。国内の新規参入航空会社の東京便を考えればそんなに不満はない。なにしろ料金は格安の3000～33800円なのだ（別途燃料サーチャージなど必要）。隣の席は福岡在住の中国人留学生。なんと3000円のチケットを手に入れ、旧正月にあわせ帰省するという。いつもは福岡発着便を利用していて、3万円くらいかかると言い、

上海旅行インフォメーション

パスポート…

■市民サービスセンター

佐賀市白山二丁目7番1号
エスプラッツ2階
☎ 0952-27-6700

交通…

■春秋航空

週2往復　水・土曜日就航

有明佐賀　－　上海浦東
12：40　－　13：45
（2時間半）

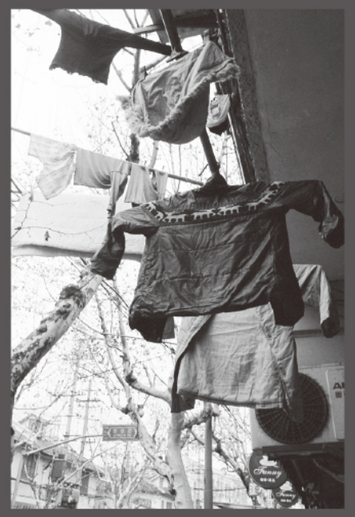
上海浦東　－　有明佐賀
8：30　－　11：10
（1時間40分）

3000～33800円（14段階）
※別途、燃料サーチャージなど必要

春秋航空ウェブサイト
http://www.china-sss.com/JP/JP_Index

■有明佐賀空港

佐賀県 交通政策部
空港・交通課
☎ 0952-25-7104
Fax：0952-25-7318
E-mail：kuukou-koutsuu@pref.saga.lg.jp
http://www.pref.saga.lg.jp/web/at-contents/kuko.html



上海は近くて面白い！

佐賀発着便の就航を非常に喜んでいた。

機内ではあつあつのランチパックや飲料品の販売もある。日本円での支払いも可能だ。フライトが終盤に差し掛かったころ、突然、キャビンアテンダントが通路に立ち体操を始める。なにやら訳の分からないうちに体を動かしていると途中で着陸態勢に。…あっという間の上海着。

機内の様子

外車で大渋滞の大都会

飛行機を降りると、初就航を歓迎する大きなメッセージが掲げられていた。上海浦項空港はかなり大きな施設。バスに乗り通関へ移動。少々ドキドキしていたが機械的にチェックされ、スムーズに通れた。

ここからは基本的にバスツアーを利用する。ガイドさんから、時差は1時間、車は右側通行、など基本的な知識を聞く。車窓からはマンションの建築ラッシュが見える。道路は車で大混雑。ベンツなど外車の姿が目につく。ガイドさんによれば中国で外車を購入するには100%の税金がかかるという。つまり販売価格の2倍。さらにナンバー取得も数十万円するというから、まさに高嶺の花。トラックは日中、市内を走ってはいけないというルールがあるにも関わらずの大渋滞。中国経済のパワーを感じる。

30分ほどで最初の目的地、外灘（バンド）の対岸に着く。あいにくの小雨模様。高さ497・9mの東方明珠電視塔を見上げながら、歩いていくと川向こうに租界時代の歴史的建築群が浮かんでくる。新旧の混合した上海らしい風景だ。

続いて外灘側にある田子坊という地区へ行く。ここは旧フランス租界。1999年に中国のアーティストがアトリエを開いてから、ギャラリーやレストランが、迷路のような路地に自然発生的に増えていったという。現代アートを紹介するお店やカフェもあり、ぶらぶら歩くだけで楽しめる。

外国の心配事と言えばホテル。お湯が出ない、トイレの水が流れないなどの話を聞いていたので宿に入って早速チェック。問題なし。歯磨き、うがい用にミネラルウォーターが2本用意されていた。携帯とカメラの充電をするのも注意が必要。変圧器と変換コンセントは必須だ。

田子坊

豫園で中国の美堪能

腹ごしらえが済んだところで、豫園へ。四川布政使（四川省長にあたる）が父へ贈った庭園で広さ約2万平方メートル。造営に18年の歳月が費やされた。迷路のような動線に細部まで意匠が凝らされた造作。奇岩をふんだんに使った庭園は、中国の美的感覚を学ぶのに格好の素材だ。園内の塀の上部は瓦で龍がデザインされていて、静的な空間に躍動感を生んでいる。もう一度、ゆっくり回ってみたい場所だ。

歴史的なものの次は最新の建造物。発展が著しい上海浦東新区に誕生した上海環球金融中心を訪ねる。地上101階、高さ492mの世界3位の超高層ビルだ。地上474メートルにある展望台は世界一の高さだ。高速エレベータであっという間に上部フロアへ。展望台で驚くのは床がガラス張りなこと。あいにくの天気なので、見晴らしは今ひとつだが、雲の上にいるような感覚が味わえた。高層ビル群の逆側には遠くまで広がる団地の列。混沌とした上海の今を感じることができる。

夜は有名な上海雑技団の見物。女性の体の柔らかさを活かした演目や男の子の帽子を使った演技など馴染みのある出し物が続く。たくさんの輪を体に通して回す演技は、腰の動きだけで自在に操る。体の周りを輪が浮かんでいるように見え、さながらSF映画のよう。シンプルなだけに驚きも大きい。最後は大きな金属の球体の中をバイクが疾走する。どんどん台数が増え、ドキドキ感も最高潮。演技を無事に終え、客席に向かってポーズを決めるライダーたちの〝ドヤ顔〟がたまらない…。

豫園

雑技団の興奮をさましながら、地下鉄で夜の外灘へ。上海中心部は午後6時から10時までライトアップが義務付けられていて、魅惑的な夜景が楽しめる。暖色系の光を上品にまとった旧租界の近代建築を眺めながら歩くと、川の対岸に色とりどりの高層ビル群が。小雨の中、幻想的に浮かぶ原色の大きなスクリーン。電視塔は新年を前におめでたい雰囲気の光が点滅している。川べりではたくさんのカップルが。ロマンチックなムードになる

高層ビルと上海雑技団

上海2日目

朝から郊外の朱家角へ向かう。明の万歴年間から続く水郷だ。現代でも当時の建物が残されている。小さな小船で川面から見物。柳川のような感じだ。船着き場の近くには路地が縦横に延びていて、地元の人がたくさん買い物をしていた。饅頭や焼豚など美味しそうな食べ物が並ぶ。古い建物を利用した雰囲気の良いカフェもあって、川の流れを眺めながら中国茶が飲める。

続いて、上海市内へ戻る。豫園は明代の庭園。ちょうど旧正月直前だったので華やかな装飾だった。周囲には豫園商城というお土産物屋さんや飲食店がある。南翔饅頭店は小籠包の本家を名乗る。お店には長蛇の列。地元の人に愛される味には外れなし。20分ほど待つ。蒸籠から手際良く出された小籠包からはアツアツの湯気。早速、味わう。皮を一口かじると、肉汁が飛び出してくる。舌をやけどしそうになるが、これが旨い。病みつきになる味だ。

朱家角

特集 —— 春秋航空
佐賀発着便就航記念

上海は近くて面白い！

新天地

虎丘

寒山寺

上海3日目

ごと請け合いだ。

早起きして近くをぶらぶら歩く。古い一戸建てが立ち並ぶ通り沿いの壁には人物レリーフが刻まれていた。戦前、文化サロンを築いた内山完造のほか郭沫若のものも。郭沫若は九大医学部に留学経験を持つ文学者。佐賀市富士町古湯に滞在したこともあり、少し下ったところの雄淵・雌淵公園に記念碑がある。思わぬところで繋がりを感じる。

散歩から帰るとバスは発車寸前。午前中は上海を出て、蘇州へ行く。高層ビルから新築マンション、そして見渡す限りの田園地帯。2時間ほどして虎丘に到着する。ここは春秋時代の呉王夫差が父の闔閭を葬った陵墓。葬儀の3日後に、墓の上に白い虎が現れたことから虎丘と呼ばれるようになったといわれている。小高い丘の上には傾いた塔が。まさに〝東洋のピサの斜塔〟だ。運河を渡ったら長い石段。剣の試し切りをさせたという刀の跡が残る「試剣石」や千人もの人々が高僧の説法を聞いたといわれる大きな一枚岩「千人石」など、ところどころに見どころがあり飽きない。20分ほど登ると頂上の塔に辿り着く。正式名称は雲岩寺塔。961年創建だが、現存するのは清代のもの。八角七層で高さ48メートル。レンガを積み上げている。

近くには寒山拾得の故事で有名な「寒山寺」がある。境内には、唐代の詩人張継が詠んだ漢詩「楓橋夜泊」の石碑があることで知られる。この石碑は明代に「三絶」と呼ばれた蘇州の文人・文徴明の筆。日本でも書道のお手本として使われているので是非、見て欲しい。

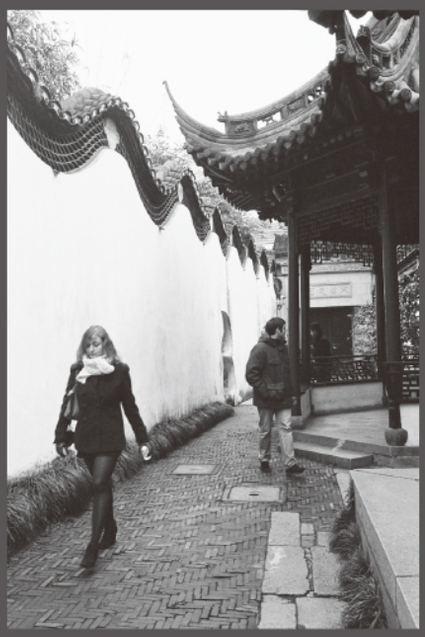
観光バスに戻っているとき、現地の人がビニール袋一杯に雑貨を入れ売りに来る。小さなバッグや巾着袋、扇子などたくさん入っている。千円でいいという。ちょっと迷っていると、他の売り子さんが近づいて来る。すかさずハンカチを3枚ほどビニール袋に入れてくる。お土産にちょうど良いと思い購入した。その後、立ち寄った刺繍工場で同じようなバッグが売ってあったが、1つ400円ほど。質の良し悪しはあるだろうがお買い得だったのに間違いない。その後、世界遺産に登録された中国四大庭園のひとつ「留園」へ行く。明代にできた敷地2ヘクタールの池を中心とした庭園。絶妙に配置された建物をつなぐ回廊の透かし窓ごしに眺める景色が印象的だ。

留園

骨董街で値切り交渉

一路、上海に戻り、古い建物を巧みに活用した「新天地」という地区を見学。有名ブランドのブティックも多く、たくさんの欧米人がカフェで休憩している。程よい幅の路地にはバーやレストランがあり、洗練された雰囲気を醸し出している。

観光は最終日ということもあり、ここでツアーを離脱。ぶらぶらと外灘の方へ。骨董品街に出くわす。狭い通りの両側に半屋外のお店がぎっしり。急須から時計、人形までいろんなものが売られている。なんとなく眺めながら歩いていると、通りの出口付近で気になる皿が。ぼてっとした厚手の生地の真ん中に金魚。染付も良い感じで力が抜けている。じっと眺めていると店主が声を掛けてきた。「これは本物の明代の皿だ」と言いながら店にあった他の皿をいくつか並べ出す。「この染付は色が鮮やかだから時代は若い。あなたが選んだのはくすんだ青だから古いものだ。自分で骨董商三代目。間違いない」と説明する。「正月前でもうすぐ営業終了するからスペシャルバーゲンで良い。希望の金額を教えて」と電卓を渡してくる。正直、器の値段など分からないので、財布と相談して「300」と打つ。頭を抱える店主。「1000」と打ち返してくる。帰ろうとすると引き留められる。「700」と入れる店主。「500」と再入力。唸り声とともに「日本だったら3万円くらいするのに…。もう閉店時間だし600元で!!」。ということで交渉成立。財布から100元を数えて出していると、まだお札が入っているのを見た店主が「もう100元出せ」と言ってくる。断固拒否。最後はお互い握手して「良い新年を!!」。以上、簡単な英単語とボディランゲージでの会話でした。多分、あの皿は600元でも、悪くない取引だったんだろうな。



活気ある庶民向け市場を抜けると夕暮れどきの外灘に。上海に詳しい方お勧めの上海蟹専門店へ行き、舌づつみ。詳しくは「至極の一皿　上海編」を一読ください。そして最後はとっておきの夜景スポットであるホテル最上階のバーへ。外灘の西洋風近代建築群と電視塔など現代的ビルの林立が同時に眺められる。午後10時、建物を照らす光が少しずつ消えていく。上海最後の夜を満喫した。

上海の夜景

上海4日目

最終日は朝5時半にホテル出発。眠い目をこすりながら空港へ。通関には長蛇の列。旧正月の帰省と重なり時間がかかる。出発までの時間は免税店を巡って過ごす。空港内のお店は朝7時から開店するようだ。残った中国元を使うべく買い残したお土産を購入する。搭乗口が隣同士でコロコロ変わったり、といろいろあったが定刻過ぎに着陸。早起きだったので席に着くと同時にうたた寝。例の機内体操で目を覚ますと間もなく佐賀空港が見えてきた。フライト時間は1時間半。荷物を受け取り、日本の税関の検査をパスして無事に佐賀へ帰ってきた。

上海の中心部には、東京にもないような高級車のショールームがあったり、欧米のブランドショップもたくさん営業している。大都会でありつつ、長い歴史を感じさせる建物をうまく活用するなど、新旧ともに見どころが多い。コミュニケーションにおいても、庶民の街であっても基本的な英語が通じるし、街なかの簡単なカフェでは、日本語の分かるスタッフがいる店が多い。最初の外国としてぴったりの街だ。逆に上海の人が佐賀へ来たときはどうだろうか。満足させるコンテンツや接客が提供できるだろうか。

さが美食倶楽部

至極の一皿

上海版

— 春秋航空就航記念 —

「成隆行蟹王府」 上海蟹

上海名物といえば上海蟹。しかし、意外にこの蟹について知られていないのでウンチクを少し。まず、上海蟹は湖など淡水の生き物で、正式には「チュウゴクモクズガニ」。はさみの周りにビッシリと繊毛が生えていて、これを「藻屑」に見立てた。佐賀県唐津市の玉島川に生息する「ツガニ」もこのモクズガニの仲間である。「ツガニ」は安価で蟹飯などうまいが、上海蟹はその濃厚な食味で多くの人々を虜にしている。

上海郊外、「陽澄湖（ようちょうこ）」が養殖の一大産地として名高く、江蘇省、浙江省が本場であるが、繁殖力が強いためどこでも養殖可能。「陽澄湖産」は高値で取引されるため、本物にはプラスチックのタグが付くが、このタグも偽物だらけなのが中国らしい。その点、上海まで行ったのなら、定評ある専門店で食べることを強くお勧めする。上海蟹のシーズンは旧暦の9月が腹の丸い雌、10月が腹の尖った雄が旬とされ（九円十尖）、街には「大閘蟹」というのぼりや張り紙が目立つ。要は初冬が雌、寒くなると雄がうまいと覚えておこう。好景気に沸く上海では専門店、ホテルの中華レストランが上海蟹料理でしのぎを削るが、今回の「成隆行」は60年前から上海蟹を香港で売買し、陽澄湖、太湖に専用の養殖場を持つ。夜景の素晴らしい外灘（バンド）エリアにも近い九江路にあり、食事の前後の散策も楽しい。店先には「蟹」の一字の巨大な旗がはためく。店構えは古い江南の邸宅を模しており、中庭を囲んで幾つもの個室が並び、年中満席の活況を呈している。ここではコース料理と決めてすべてを店に任そう。小ぶりな上海蟹を剥くのは面倒だし、細い脚の肉までほじくってくれるから、手を出さない方がよい。蟹ミソと豆腐を和えた「蟹粉豆腐」のうまさに驚き、蟹ミソそのものの濃厚さに思わず顔がほころぶ。これに少し奮発した紹興酒を合わせると至福の時である。日本でも東京の「中国飯店」系列の高級店でまずまずの上海蟹がいただけるが、驚くほど高価。また、中国国内各地でも上海蟹を出すが、やはり旬の本場老舗店の風格は格別。佐賀からも身近になった上海で、本物の中国料理の素晴らしさを堪能したい。

住所／上海市九江路 216 号
営業時間／11：00～14：30、17：00～22：30
年中無休・日本語可　☎(021)63212010